

川崎正蔵と薩摩人脈

三 島 康 雄

- I 川崎正蔵の研究史
- II 築地造船所の開設と大久保利通
- III 川崎と松方正義
- IV 川崎と五代友厚
- V 官営兵庫造船所貸下げ願の提出
- VI 川崎への貸下げ決定の経過
- VII 兵庫造船所の川崎への払下げ
- VIII むすび — 川崎の人脈形成能力

I. 川崎正蔵の研究史

川崎造船所の創設者である川崎正蔵の企業者活動については、彼の7周忌にあたる大正7年(1918)12月1日に、神戸の布引山の中腹に彼の銅像の除幕式が行われた際に、引出物として参列者に配られた山本実彦著『川崎正蔵』⁽¹⁾が出版された以外は、第2次世界大戦が終了する昭和20年(1945)まで、全く研究は行われなかった。山本実彦はジャーナリストで川崎家から依頼されてあわただしくこの伝記を書いたため、その内容は文学的な空疎な表現で記述され、川崎の企業者活動についてはきわめて不十分な伝記であった。

昭和30年代に入って明治政府の殖産興業政策の再検討が経済史家によって開始され、戦前の明治絶対主義政府による軍器生産機構創出政策としての見解より、近代化助長政策としての性格を強調する見解が強くなり、政府側の政策だけでなく、それを受けとめた企業者の研究の必要性が叫ばれるようになった。

このような研究方向の流れの変化により、また財閥研究が経営史研究者によって深化されたこともあり、殖産興業政策、とくに官営工場払い下げについての研究が、学界で大きく取り上げられるようになった。恐らくその最初は、楫西光速『政商から財閥へ』⁽²⁾であった。こうして川崎正蔵もにわかに脚光を浴びることになった。さらに大島清ほか共著『人物・日本資本主義3 (明治初期の

企業家)』⁽³⁾が出版されたが、ここで取り上げられた川崎の資料は、すべて山本実彦著『川崎正蔵』から引用されたもので大同少異であり、川崎の企業者活動は十分に解明されなかった。寺谷武明「産業財閥 — 浅野・川崎・古河 —」⁽⁴⁾も同様である。

楫西の研究の系譜を継承した小林正彬は、昭和40年ごろから官営工場の払下げの具体的な研究を開始し、高島炭坑、釜石製鉄所、長崎造船所、兵庫造船所、富岡製糸所、三池炭鉱、佐渡・生野鉱山の払下げについて、政府と企業の両面から詳細な研究を行い、その成果は『日本の工業化と官業払下げ — 政府と企業』⁽⁵⁾として結実した。小林はこの中の「兵庫造船所の払下げ」の論稿において、山本実彦『川崎正蔵』のほかに川崎重工業株式会社神戸造船所に保蔵されている資料を用い、これまでの研究をかなり前進させることに成功した。さらに三島康雄は「川崎財閥」(『阪神財閥』⁽⁶⁾所収)において、川崎家が保蔵していた大量の原資料を利用して、川崎正蔵の企業者活動ならびに官営兵庫造船所の川崎への払下げ過程について、より明確な研究を展開した。小林はさらに『政商の誕生 — もうひとつの明治維新』⁽⁷⁾を書いたが、その中の「川崎正蔵」の論稿の内容は、新しい研究動向を取入れて概観したものである。

以上のような研究史の展開において、最も大きな論争点となったのは、明治19年(1886)4月に

官宮兵庫造船所の貸下げが決定された時に、造船業経営の経歴においてはるかに優っている平野富二⁽⁸⁾ではなく、川崎正蔵が貸下げを受けた理由は何であったかという点である。この点について小林正彬は「川崎へ払下げたのは、かれの資力に対してではなく、またたんに薩摩出身者であったからでもない。造船業者として10年近くの実地の経験に対してであったと考えられる。」⁽⁹⁾「平野富二の造船所（石川島造船所のこと — 三島）は老朽不要施設であるとはいえ、ドックの貸与その他で、政府は便宜をはかり、政府軍艦を発注できるほどの水準に達した。そこにまた、兵庫造船所を貸与、払下げるとは、バランスの上から好ましくないと判定したのではないか。さしあたり、石川島、横浜などの旧藩官宮施設を借用していた平野富二は、貧乏くじをひいたことになる」⁽¹⁰⁾と述べて、「薩長藩閥内閣とのあいだの取引に川崎正蔵が成功した」という「陰謀説」に疑問を提出している。これに対して、平野富二と石川島造船所の研究を行ってきた寺谷武明は、「虚心に判定すれば、実施の経験において、いずれがすぐれているかは一目瞭然である。しかるに、政府は両者を相当の資格があるものと対等に評価し、合同事業をすすめるなど、実力伯仲あつかいをされては平野にとっては心外であった。あげくのはて、政府は「先願者ニモ有之」というこじつけた理由で川崎に貸下げたが、相当強引なやり方である。平野には納得のいかない決定であるといえよう。実地経験に勝る平野が退げられたからには、川崎正蔵と松方正義を介しての藩閥政府との取引が物を言った面もあるのではあるまいか。」⁽¹¹⁾と小林説に批判を投げかけている。

本稿ではこの小林、寺谷両氏の所論に関連して、官宮兵庫造船所の貸下げの背景にある、川崎をめぐる薩摩人脈の内容と影響を探ることを目的とするものである。

II. 築地造船所の開設と大久保利通

川崎正蔵は天保8年（1837）に鹿児島の大黒町で、利右衛門の長男として誕生した。川崎家の祖先は武士であったが、父の代には没落して土籍を脱して木綿の行商人になっていた。15歳ごろから家計を助けるために鹿児島を根拠地とする有名な冒険的海商の浜崎太平次の経営する山木屋の二流

店員として就職し、嘉永6年（1853）に山木屋の長崎支店に赴任した。川崎は鹿児島と長崎で貿易、海運、造船などの事業を経営する訓練をうけ、また薩摩藩や幕府の近代的洋式船舶の造船業から多くの刺戟をうけた。また川崎は山木屋の大阪支店（立売堀北通6丁目の薩摩藩屋敷の隣にあり、薩摩屋と呼ばれていた）の支配人の肥後孫左衛門、長崎支店（薩摩藩屋敷の東側の西浜町にあり、出島のオランダ商館や中華街とも至近距離にあった）の支配人である中村八左衛門、新潟支店の支配人である鍵富三作らと交遊関係を結んだが、これが後に川崎の事業に大きな影響を与えた。

また川崎が長崎に滞在した嘉永6年（1853）から文久3年（1863）までの10年間に、明治維新後の日本の近代化に大きな役割をはたした青年たちが長崎に遊学しており、川崎の生涯のどこかでかわりを持った五代友厚、福沢諭吉、伊藤博文、岩崎弥太郎、前島密、高杉晋作らも、川崎と同じ時期に長崎に滞在していた。五代の他は薩摩藩以外の出身者であり、また彼らは若きエリートであったから、浜崎家の山木屋の下級店員であった川崎とは、おそらく交流はなかったであろうが、同じ幕末の動乱期に長崎に滞在していたという共通の経験は、川崎が後に彼らと交際するのに、大いに役立ったものと思われる。

川崎は文久3年（1863）に大阪に移り、小商店を経営するが失敗し、その後は浜崎家の経営していた堺紡績所や官糖販売などを受継いで資本を蓄積してゆくが、この過程はすでに述べたので、ここでは省略する。⁽¹²⁾

川崎は明治4年（1871）に上京し、深川佐賀町に住んで小商店を開いたが、すでにこの頃には造船業参入の決意を定めていた。折しも明治政府は条約改正の準備のために、いわゆる岩倉使節団を欧米に派遣し、4年11月に横浜を出港した一行は6年5月に帰国したが、その全権大使副使をつとめた大久保利通（薩摩藩出身）は、とくに造船業の確立による近代的な海軍や海運業の発展は殖産興業政策の主要な課題であり、明治3年の太政官布告の西洋型船の奨励策の実行を強く主張した。川崎は大久保の説に大いに賛意を表し、殖産興業の最高責任者である大久保が、西洋型船の建造可能な造船所の建設推進に強い熱意を持っているのを確認し、造船業に参入することを決定した。⁽¹³⁾

大阪から上京した直後の小商人の川崎が、内務卿という明治政府の最高の地位にあった大久保にどうして面会できたのか不思議であるが、薩摩出身の誰かが紹介したとしか考えられない。

川崎はついに明治9年9月に、駒通頭の前島密あてに、「西洋形風帆船製造資金拝借奉願候書附」を提出し、東京と兵庫の2カ所に造船所を開設するために、50万円の興業費の借用を願い出た。前島は9年から内務少輔を兼任して大久保との関係も深くなり、船舶確保について大久保から指令を受ける立場にあった。この川崎の願書は前島から大久保内務卿に提出され、大久保は大隈重信大蔵卿に、

「西洋形風帆船製造資金之義ニ付伺

別紙川崎正蔵、在来日本形船ヲ改良セン為メ、西洋形風帆船製造資金拝借上願之趣ハ、我海運之積弊ヲ一掃スヘキ大基礎ニシテ、而カモ日支貿易之開遂ヲ謀ルモ、大ニ良□之風帆船ヲ要スヘキニ付、政府ニ於テモ大ニ御着手相成度一要件ニ候得共、其事業之創立ハ御許可ニテ相当之御保護モ有之度義ニ候（後略）」⁽¹⁴⁾

という伺を出して、川崎の趣旨は殖産興業の方針に適しているので、50万円を内務省へ下付してほしいと依頼した。しかし興業資金の不足のために、わずか3万円しか貸与されなかった。しかも川崎が11年5月にやっと築地に造船所を開設してから8日後に、大久保は東京の紀尾井坂で暗殺されてしまい、川崎は最初の保護者を失ったが、これが川崎が薩長藩閥政府の有力政治家と関係を持った初まりであった。

III. 川崎と松方正義

川崎と松方正義との関係は、すでに論じられているが、ここで政治以外の交流もふくめて再検討してみよう。

松方は天保6年（1835）2月25日に鹿児島の下荒田で生まれ、川崎よりも2歳年長であった。彼は薩摩藩の御勘定所出物問合方を手始めに、大番頭座書役、御家老座御帳掛書役、郡奉行と出世街道を進み、文久2年（1862）3月に島津久光の供として初めて京都へ行き、その後もしばしば京都、大坂へ派遣され、鹿児島～大坂間は船によって航行したが、松方と川崎が初めて出会ったのは、この時期の大坂への船上であった。

松方は青年時代から大久保に兄事して接触を保っており、明治維新後に大久保が松方を抜擢し、松方も大久保の路線を踏襲して殖産興業路線を遂行するという関係は、すでにこの頃から始まっていた。維新直後の慶応4年に、松方は大久保の推薦で日田県知事に任命され、明治3年10月に再び大久保の推薦で中央政府の民部大丞に栄転し、4年8月に大蔵権大丞、6年7月に租税権頭、8年12月には大蔵大輔に就任し、9年に勸業頭と授産局長を兼任し、川崎の造船場創設に関係のある地位に姿を現わしてくる。さらに松方は13年2月に伊藤博文の後をうけて内務卿に、また14年に大隈が下野した後に大蔵卿に就任し、18年12月から25年8月まで大蔵大臣となり、24年から総理大臣を兼務した、薩摩出身の大物政治家であった。⁽¹⁵⁾

川崎と松方の政治的な関係を示すような、直接的な資料は少ない。しかし川崎は松方とその代理人の大久保之昌（旧薩摩藩士で、息子の勇は後に松方首相の秘書をつとめた）に、明治9年4月から13年8月にかけて17回も、合計9,670円の貸金をしてしたが、これは実質的には政治献金であった。⁽¹⁶⁾ 明治8年ごろから川崎と松方の交遊は繁くなり、松方は来阪の時には川崎の大阪邸に宿泊することもあり、川崎も東京・三田の松方邸をよく訪れていた。松方は川崎との関係について、

「それから鹿児島島の豪商たる浜崎の代理、中村喜作と共に上京した時、逢ふた事を記憶して居る。たしか琉球、大阪間の貢物等の運賃及び運送の事に関してならん。…別に私から大した世話をなした訳ではなかったが、問題があればチョイチョイ世話はした」⁽¹⁷⁾

と述べ、琉球貢糖の輸送ならびに販売について川崎に尽力したことを認めている。しかし松方は、薩摩藩出身の政府高官として、同郷の川崎に露骨な援助をするのを避けていたようで、川崎が明治9年に築地造船所創立の費用として50万円の借用を申込んだ時、松方は「川崎の問題は我輩は敢へてあずかり知らぬ。もし必要あらば、誰かその係りに委細話し置かれたし」⁽¹⁸⁾と答え、松方の子分として知られていた郷純造国債局長が大蔵省を代表して、その処理にあたった。

しかし松方正義の三男の幸次郎が、大学予備門を中退して明治17年4月に渡米してラトガーズ大学に入学した時、松方は幸次郎の学資の立替えを

川崎に依頼しており、幸次郎の生活費と学資を合わせた年間800円の費用は、川崎から森村組ニューヨーク支店に直接送金されたといわれる。⁽¹⁹⁾ 両者の深い関係を物語るエピソードである。

IV. 川崎と五代友厚

これまでの研究史上で、川崎と五代の関係は一度も論じられたことはない。しかし『五代友厚伝記資料』（日本経営史研究所編、1971年）第1巻の書翰の部を見ると両者の間でとりかわされた手紙が10通（うち1通が五代から川崎への手紙）収録されており、また大阪商工会議所編刊『五代友厚関係文書目録』（1973年）には、『伝記資料』に収録されていない川崎から五代あての手紙14通が収録されている。これらの手紙を解読すると、五代と川崎の密接な関係を読みとることができる。

五代の略歴を川崎と関係のありそうな所を中心に眺めてみると、まず五代は天保6年（1835）12月26日、すなわち川崎より1年半前に、薩摩国鹿児島郡城ヶ谷で、藩の儒臣の直左衛門の二男として誕生し、安政4年（1857）2月から藩命により長崎に遊学し、海軍伝習所で航海、造船、蘭学を学び、翌年に一度帰郷した。安政6年に再び長崎に行き、藩命により蒸気内輪船の天佑丸を購入し、文久2年（1862）1月には藩の御船奉行副役となり、慶応1年（1865）3月には薩摩藩の留学生15名を引率して訪欧し、7月にはイギリスのプラット社で藩のために紡績機械を買入れ、鹿児島紡績所の基礎を築いた。明治1年（1868）2月には新政府の外国事務局判事として大阪在勤となったが2年7月には一切の官職を辞任し、10月に金銀折所を創設して巨利を獲得し、実業界で活躍する足がかりを作った。3年4月には薩摩藩から堺紡績所係を命じられ、廃藩置県後の5年6月には鹿児島県から国産会社大阪出張所係に任じられて、黒砂糖を中心とする薩摩の産物を販売し、6年1月には弘成館を創設して鉾山経営を統轄し、7年3月には東京の京橋築地入船町8丁目に弘成館出張所を設けてしばしば出かけた。11年6月には大阪株式取引所を設立し、9月には新設の大阪商法会議所の初代会頭に選出された。14年には住友の広瀬幸平と共願した大阪製銅会社の創立が許可された。⁽²⁰⁾

このような五代の略歴の中で、川崎とはどこで出会ったのであろうか。五代が長崎で御船奉行副役として薩摩藩のために軍艦を購入するために奔走していた頃、川崎のつとめていた浜崎家長崎支店も軍艦購入を斡旋しているので、この時期から両者の交流が始まったのではないと思われる。また五代は明治3年4月から薩摩藩の堺紡績所係を命じられたが、この紡績所の原料の購入と製品の売買は、川崎がつとめていた山木屋の大阪支店である薩摩屋の支配人の肥後又左衛門が行っており、堺紡績所は5年4月に官営になった後、11年2月に肥後に払下げられ、14年6月には川崎正左衛門、すなわち川崎正蔵の長男に譲渡されたが、実際の出資者は川崎自身であったのは、いうまでもない。五代は浜崎家と多くの関係を持っていたので、堺紡績所が浜崎家、次いで川崎家によって経営されることになったのではなからうか。また川崎は明治2年から2年間、薩摩藩の大阪下屋敷に旧藩士たちが設立した砂糖会社に入社したが、これも鹿児島県の大坂での砂糖販売にかかわりを持っていた五代の斡旋によるものではなからうか。

また五代は明治7年3月に東京の京橋築地入船町8丁目に弘成館出張所を設けて、しばしば長期滞在したが、この入船町8丁目は、明治9年9月に川崎が築地の南飯田町に創設した川崎造船所から、東へわずか200メートルしか離れておらず、また五代の東京別邸は築地の大川端よりあって築地2丁目にあった川崎邸とはすぐ近くであった。2人はこの築地でしばしば交遊していたのを、我々は手紙によって確認することができる。

五代は東京にいる薩摩藩出身者たちと親密な関係を保っており、明治2年に下野した後も、政治家では殖産興業論で意見が合った大久保利通とは特に親しく、さらに中井弘、寺島宗徳、松方正義、海江田信義、また官寮では森有礼、高崎正風、税所篤、籠手田安則、吉田清成、軍人では黒田清隆、西郷従道、川村純義らと親しかった。これらの人物の多くが川崎の生涯のどこかで関係していたことから考えると、五代、大久保、松方を中心とする薩摩人脈ネットワークの中に川崎も存在していたわけであり、造船企業家としての川崎の成功は、これらの政・官・軍の薩摩出身者たちの、各方面からの支援による所が多いと考えてよいであろう。

これから五代と川崎の間で交された手紙に基いて、両者の関係を検討してみよう。

- ① 明治11年5月6日に創設された築地の川崎造船所は、早くも7月15日に第一船の「北海丸」の進水式を行い、川村純義海軍卿をはじめ、内務省、大蔵省、北海道開拓使などの高官が列席したが、川崎は五代の斡旋により、事前に伊藤博文内務卿と大隈重信大蔵卿に進水式に出席してくれるように依頼し、所用のために欠席するが次の進水式に出席する約束をとりつけている。また7月12日に五代から送られた品物を川崎は伊藤内務卿の所へ届け、伊藤は中井弘工部大書記官（薩摩藩出身）⁽²¹⁾をつれて、17日に川崎造船所を訪れている。
- ② 明治11年12月中に五代が東京に滞在中に、政府の要人に川崎を紹介しており、川崎は親子橋様（誰のことか不明）へ参上して御礼を申し述べ、「御懇切ノ義」を命じられている。また12年1月6日に駅通局より抵当品監査の後、御下付金を頂く旨を報告している。⁽²²⁾
- ③ また明治12～13年ごろの手紙では、前年の暮に川崎は五代から借金し、返済の期限が迫ってきたので利子だけ払って元金の返済は延期してもらい、さらに2万円の借金をすることを五代に承知してもらった。川崎は造船所創設後の苦しい資金繰りの一部を、五代からの借金によって補っていた。⁽²³⁾
- ④ 明治12年10月9日付と思われる手紙では、川崎は五代の示唆によって松方家を訪れ、奥方に何事かを依頼し、渡辺昇大阪府知事もいて、打合わせはうまくいった。また築地の造船所も注文が増え、職工も手馴れてきて製造費も減少し、ゆくゆくは利益を生むと思われるが、相変わらず資本の欠乏を訴え、重ねて五代の助力を乞うている。また海運の独占度を高めてきた三菱に対抗して、三井と全国の中小海運業者が設立しようとしている東京風帆船会社の創立に、五代も協力することを要請しており、川崎が企図していた兵庫の造船所の設立について、何事かを五代に強く懇願している。また薩摩出身の吉原重俊外務省議案局長とも、五代を通じて親しかったようである。⁽²⁴⁾
- ⑤ 明治13年12月に書かれたと思われる手紙では、川崎は五代に対して、製造済の3隻の船と製造

中の3隻の船の製造費45,750円、ほかに造船所倉庫予備船具一式、諸材木貯蓄高、（神戸）造船所設立諸費用合計42,000円余について報告している。川崎は五代から借金したので、造船所の経営の概要を報告したものである。⁽²⁵⁾

- ⑥ 明治12年7月21日に書かれたと思われる手紙では、川崎は五代に次のように依頼している。「拜呈、昨朝ハ參館義御□命奉大謝候。扱其節御囑申上置候製銅会社売捌所約定之義、別紙同社長ヨリ草稿ニ基キ当船具店へ見込書為相立申候処、少々十分之廉モ相見得候ニ付、段々添削為致候上、朱書之通相改奉入御読ミ候付、尚御高読之上可然御下命可成迅速御決定被下候様奉願上候。何レ後刻御暇迄参上委細御願可申上候得トモ、右之段得貴意度如此御座候也。

七月二十一日 正蔵拜
松陰様

この手紙の中の製銅会社とは、すでに銅山経営の経験を持つ五代と広瀬幸平（住友家総理人）が共同で発起し、明治14年3月16日に設立された大阪製銅会社のことであり、同社は日本で最初の近代的民間伸銅工場であって、広瀬が初代社長に就任していた。この川崎の手紙は、大阪製銅会社の製品を、明治12年に東京の京橋三十間堀に開業していた川崎船具店で売捌くことを、早く決定してほしいと五代に依頼したもので、両者の密接な関係を示している。

- ⑦ 年不詳の8通の手紙をみると、五代を中心にして、川崎正蔵、諸戸清六、久保之昌の密接な関係を知ることができる。諸戸は明治10年の西南の役の時に、米価騰貴を見越して米を買い込み、また銀貨に対して打歩を生じた紙幣を買い占めて莫大な利益を得た男で、川崎は明治11年に東京の築地に造船所を設立した際に、諸戸から多額の融資を受けたが、川崎はその一部を返金してその分を五代からの新しい融資を得て穴埋めをしていた。また川崎は横浜における貿易についての情報を五代に提供し、また薩摩出身の久保之昌が間に入って、他の有利な情報を川崎に提供していた。また久保の斡旋で川崎は五代に、ある金山の購入をすすめている。また川崎はしばしば五代から指令をうけていた。

以上のほかに、川崎は親友の森村市左衛門に五代へ融資を依頼する斡旋をしたり、また滋賀県令

の中井弘の紹介で屋久島産のフノリを皇居建造用に宮内省に納め、その代りに中井の書いた漫遊記の代価を立替えるという役を押しつけられたが、この件にも五代が関係している。このように手紙を通して見た川崎と五代の関係はきわめて親密であり、松方と五代を中心とする薩摩人のネットワークの中に、川崎が入りこむことのできた意味はきわめて大きなもので、川崎の造船企業家としての成功は、この人脈によって支えられていた。

V. 官営兵庫造船所貸下げ願の提出

川崎正蔵は明治11年5月に東京の築地に川崎造船所を設立した時から、神戸への進出を企画しており、この計画は14年3月に神戸の官営兵庫造船所の西側に兵庫川崎造船所を開設することにより実現した。これは官営兵庫造船所の貸下げと払下げを目標にした、川崎の戦略の第一歩であった。その直後に、二回にわたって兵庫造船所の払下げを出願したが、彼の意図は完全に無視された。工部省工作局は明治14年8月に、兵庫造船所の払下げ価格を553,660円（10カ年賦）と概算したが、これに見合う資産を持っている応募者はいないという理由で、払下げは行われなかった。

川崎は明治19年2月18日に、谷干城農商務大臣に「兵庫造船所貸下げ願」を提出したが、彼はこの中で、自分が東京と兵庫の両造船所で8年間の経営の経験を持っていることを強調し、また熟練した技術者も養成しているので、西洋型蒸汽船を建造しなければならないという時代の要請に応じるために、兵庫造船所を貸下げて頂きたい旨を述べている。それから1カ後の19年3月に、平野富二も農商務省あてに、同じく「兵庫造船局拝借願」を提出した。平野は弘化3年（1846）8月に幕臣の二男として長崎に生まれ、15歳で幕府の設立した長崎製鉄所の機関手見習い、16歳で幕府所有の西洋型汽船の乗組機関手、さらに20歳で幕府の軍艦「回天」の一等機関士となった。維新後に長崎製鉄所が新政府に接收されると、平野はその機関方、さらに所長となり、さらに長崎製鉄所兼小菅造船所の所長になった。一度辞任した後、平野は明治9年6月に石川島修船所が閉鎖されるという情報を聞き、「海軍省付属石川島ドック拝借願」を東京府あてに提出して許可され、こうして出発した石川島造船所は、次第に蒸気機関付帆船の建造を

ふやし、17年には横浜製鉄所の施設をすべて石川島に移築して、造船能力を発展させていった。⁽²⁷⁾そして明治19年3月に平野が農商務省に提出した「兵庫造船局拝借願」は、①明治9年に石川島造船所を拝借仰せつけられ、数年の困難をなめ、造船事業の経験を積んで技術の改良をはかってきた。②昨年、海軍省から一等砲艦および水雷蒸気船の製造を仰せつけられ、世上の信用を得て事業は盛大になってきた、という点を強調している。

この時期に提出された川崎の経歴書を見ると、明治11年4月から東京と神戸の両造船所で建造した船舶は、40トンから627トンまでの風帆船50艘、その合計総トン数8,115トンで、資本金合計15万円のうち72,000円が拝借金で、30年賦で毎年2,666円ずつ返納する予定であった。これに対して平野の経歴書では、造船業の経営歴は文久1年（1861）の長崎製鉄所機関手見習いに着任以来25年に達し、また新造した風帆船13艘、2,918トン、また蒸気船41隻、2,478トンであり、営業資本は10万円で拝借金はなかった。⁽²⁸⁾この両者の経歴書を比較すると、川崎は経験年数は8年間にすぎず、建造船舶も風帆船だけであるのに対し、平野は長崎から数えて25年に達しており、建造船舶も風帆船や蒸気船だけではなく、海軍の砲艦まで建造しており、誰の目にも平野の方が優位に立っているのは明らかであった。

VI. 川崎への貸下げ決定の経過

川崎と平野の両名から拝借願を受取った西郷従道農商務大臣は、4月に伊藤博文内閣総理大臣に「兵庫造船所処分ノ件」を提出し、兵庫造船所は本省の管理に属してきたが、本省所属の管船局が逋信省に移されたので管理上不便なので、1月から同省と協議して管理換の義を閣議に提出しようと企画していた事情を説明し、さらに次のように提案した。

「右願人兩名ガ営業上ノ経歴ヲ調査セシメシニ、別紙戊号ノ通ニシテ、其事業ノ経歴ニ於テハ何レモ相当ノ資格ヲ有スルモノナリト雖モ、将来尚一層該業ノ拡張ヲ図ラント欲セバ、右兩名ヲ合併シ合資営業ヲ執ラシムルニ若カザルベシト思惟セシヲ以テ、私ニ其合併ノ事ヲ説諭セシメタリシニ、両者ノ意向自カラ相投ゼザル所アリテ、終ニ相合セシムルヲ得ズ。就テハ両者

ノ中、川崎正蔵ハ殊ニ先願者ニモ有之、旁以テ該所貸下ノ義同人ニ決定センコトヲ望ム。乃チ貸下手續約定案ヲ添附シ、閣議ノ決裁ヲ請フ⁽²⁸⁾

ついで4月20日に内閣書記官から、貸下げ手続や約定案に不都合の点がみえないので、築地造船所の川崎正蔵は先願者につき、同人に貸下げるのが至当であると認められ、よって指令案を具して閣議に供するという文章が提出され、4月27日の閣議で「請議ノ通」と承認され、伊藤内閣総理大臣をはじめ9人の閣僚が承認の捺印をし、ここに官営兵庫造船所の川崎への貸下げが決定した。

その背景にはどのような事情が存在したのであろうか。4月27日の閣議で承認の捺印をした閣僚は、伊藤博文総理大臣（長州藩）、田中光顕内閣書記官長（土佐藩）、井上馨外務大臣（長州藩）、山県有朋内務大臣（長州藩）、松方正義大蔵大臣（薩摩藩）、大山巖陸軍大臣（薩摩藩）、山田顯義司法大臣（長州藩）、榎本武揚逓信大臣（幕臣）、森有礼文部大臣（薩摩藩）であり、⁽³⁰⁾ 両名から拝借願を受取った西郷従道農商務大臣兼海軍大臣（薩摩藩）を入れると、薩摩藩出身者4人、長州藩出身4人、土佐藩出身者1人、幕臣出身者1人であった。しかも造船所の払下げに最も関係の深い農商務大臣、海軍大臣、大蔵大臣が薩摩出身であり、貸下げの実務を担当した吉田清成農商務次官、兵庫造船所の管理部門である農商務省工務局の大山綱昌次長も薩摩藩であった。

川崎と松方は、前述のように献金や幸次郎の学資負担を通じて、きわめて密接な関係であった。大正7年に出版された『川崎正蔵』という伝記の著者の山本実彦は、多くの関係者にインタビューを行なって証言を聞いた後で、次のように述べている。明治11年に川崎が築地造船所を創設する時、松方は「川崎の問題は我輩は敢へて與り知らぬ。もし必要あらば、誰かその係りに委細話し置かれたし」と淡白をよそおったが、実際は「借款人が同国人にして、かつ知己なる関係より、諾否の明答を回避せるものにして、その底意には充分に翁を援助するの意思ありたり」、⁽³¹⁾ さらに19年5月の兵庫造船所の貸下げについても、「正面より堂々と乗り込みて、閣僚の意思を動かし、廟議の決定を迫りしは、松候にあらずして井上馨候なりき。高木男爵に拝借許可の内意を含めて、川崎を訪問せしめしも井上候なりき。翁の知己は井上候にし

て、翁を庇護する立役者も井上候なりしが如きも、その内実は決して井候に非ずして、松候なり。…松候は井候の如く批難の的たるを回避すべく、かえって翁の事は他より持込ませしものならんか」、⁽³²⁾ さらに川崎と伊藤総理大臣の関係について、「川崎翁と伊藤博文公とは、明治初年より知合となりたるが、両氏の連鎖となりて紹介役となりしは中井弘氏にして、翁が大久保利通公の邸に出入せる頃より、一層深き知己となれり」。⁽³³⁾

川崎を伊藤に紹介した中井弘は薩摩藩士の長男として生まれ、造士館で学び、脱藩して帰朝後は宇和島藩に仕え、藩の周旋方として京都で諸藩の志士と交際し、伊藤とはこの頃に京都で知り合った。明治維新の直後に外国事務各国公使応接係を命じられ、神奈川判事、東京府判事を歴任し、欧米各国を巡視した後、17年から滋賀県知事に就任していた。川崎と中井は五代友厚を通じて交際があったことは、すでに見た通りである。ここでも薩摩人脈が川崎と伊藤を接近させたことになる。

以上のような貸下げの経過と人脈を調べてみると、次のような筋書きで進行したことが想像される。松方蔵相は川崎から多額の資金提供をうけ、個人的にも親しかったので、川崎に貸下げたいと思ったが、慎重な松方は表面に出ることを好まず、吉田農商務次官と大山工務局次長に裏工作をさせ、西郷海軍大臣には異存ない旨を返答させ、さらに西郷農商務大臣（19年3月から兼任）は、海軍・逓信の両省は貸下げを得策し、農商務省も意見は同じで、川崎は先願者であるという理由で兵庫造船所の貸下げは同人に決定したい旨を伊藤総理大臣に申告した。ここまではすべて薩摩出身者の人脈で進行してきたのである。伊藤はかねて知り合いの川崎のことであり、また薩摩出身者の閣僚が陰で推進しているので川崎に決定したいと思ったが、明治14年の開拓使払下げ事件のように薩摩出身者の人脈が表面に出ては、世論の批難によって内閣の運命にもかかわりかねないので、同じ長州出身の井上馨に話して、閣議では井上が強硬に川崎への払下げを主張し、伊藤が全員の異議のないようにまとめて、川崎への払下げを決定したものである。伊藤と井上は幕末に共に長州藩の下級武士で、密航して英国にわたって一年近くを過ごし、維新後は井上は大蔵大輔として、また伊藤は工部大輔として殖産興業政策の先頭に立った仲

であった。長州藩出身の貸下げ希望者がいなかったの、伊藤の内意をうけて井上が川崎への貸下げを強硬に主張したと思われる。幕臣出身者の榎本武揚逋信大臣がいたが、函館の五稜郭で官軍に抵抗して投獄され、後に許されて明治政府の官僚になった榎本が、同じ幕臣出身の平野富二への払下げを主張することは、到底できなかったであろう。

なお兵庫造船所貸下げ決定の報をもたらすために、井上馨が川崎の所へ派遣した高木男爵とは、川崎の主治医でもあった高木兼寛のことである。高木は嘉永2年（1849）9月に日向国で薩摩藩士の二男として生まれ、17歳の時から鹿児島で石神良策の門に入って医学を修め、さらに鹿児島で英人ウイリスに医学を習い、医学校長となった。明治5年に上京して兵部省海軍9等出仕病院付となり、イギリス留学の後、東京海軍病院長、大医監、軍医大監をへて、18年に37歳で海軍軍医総監、軍医本部長と急速に出世した。その他に成医会会長、共立東京病院長、東京慈恵院長、海軍医学校長を歴任し、明治期医学界の大立物であった。政治家や実業家の主治医としても有名で、薩摩出身の政治家の松方正義の主治医、さらに松方の紹介で五代友厚の主治医をもつとめていた。高木が明治13年にイギリス留学から帰った直後から川崎正蔵の主治医もつとめるようになったが、これも松方の紹介であった。薩摩出身者の人脈は、このような関係にまで及んでいたのである。

VII. 兵庫造船所の川崎への払下げ

このような過程をへて官営兵庫造船所を貸下げられた川崎は、徹底した合理化、すなわち人員削減、給料切下げ、上架料引下げなどを相次いで実行した。また官営時代から引継いだ、大阪商船の注文した5艘の船の建造による代金収入が、川崎造船所の初期の経営を順調に進行させる支えとなった。また宣伝や広告にも努力し、東西の新聞にしばしば広告をのせている。このような川崎の企業家的努力によって、川崎造船所は官営時代とは異った民間企業としての新鮮なイメージを与えることに努力していった。貸下げから5カ月たった明治19年10月に、川崎は農商務省に対して、貸下げ財産価格の10%の保証公債証書を、造船所の設備が老朽化して新築・修繕を要するものが多いことを

理由に5%に減額してほしいという内容の「保証公債証書減額願」を提出し、山県有朋・農商務大臣から伊藤博文総理大臣に提出された議案は、12月7日に閣議で承認された。

これによって大きな自信を得た川崎は、予定の方針に基いて、明治20年6月9日に次のような払下げ願を山県農商務大臣に提出した。

「兵庫造船所御拂下願

昨年五月、旧兵庫造船所拝借御許可被成下、爾來御命令ヲ遵奉シ、営業罷在候処、右ノ内諸建物ノ已ニ老朽ニ属シ器械ノ実用ニ供難ノモノ多ク、特ニ其用ヲナスモノモ大半古形ニシテ、一兩年中ニ改良セザレバ到底維持ノ方法難立ト苦心仕、頃來煉化石倉庫、製罐工場等ヲ新築シ、尚錐器械スチームハマ外ニ三ノ新器械据付、専ラ改進ニ熱心罷在候折柄、熟々今日迄ノ経過ヲ推シ、将来ヲ考慮シ、拝借ノ機械雜具日々相損ズルノミ故ニ、私力ヲ擲チ、随テ増設スルトキハ幾ント新旧混合、終ニハ拝借ノ分減ジテ私設ノ分多ク可相成乎、何分ニモ此俚儉安難致居モノノミニ御座候間、即チ今ヨリ諸建物ノ改築、器械ノ改良ヲ計リ、内外ノ信用ヲ厚シ、向來ノ繁昌ヲ得度候ニ付、何卒拝借財産ノ価額金拾八万八千貳拾九円九拾錢老厘ヲ五拾ヶ年賦トシ、此際悉皆御拂下被成下度、本議御許容ノ上ハ心至工業ノ進歩ヲ図リ、乍恐国家万一ノ時ニハ特恩ニ奉報度微衷ニ御座候。伏願ハ特別ノ御詮議ヲ以テ御聞届被成下候様、只管奉願上候也。

兵庫川崎造船所

川崎正蔵

明治二十年六月

農商務大臣伯爵 山縣有朋殿 」（³⁴）

この払下げ願は、4月25日に三菱社の岩崎彌之助から提出された長崎造船所払下げ願ときわめてよく似ており、設備の老朽化と50カ年賦にすることを願出ている。この願文は7月5日の閣議で承認され、翌6日には川崎に払下げ命令書が通達された。

そして10月になると、川崎は農商務省に対し、兵庫造船所の払下げ代金と需用品払下げ代の残金を「一割利引計算法」によって一時に完納したいと願い出たことが、次の文書により明らかである。

「兵庫造船所拂下代金等処分ノ件

元当省所轄兵庫造船所拂受人川崎正蔵ヨリ、今般該所拂下代金拾八萬八千貳拾九円九拾錢壹厘ハ五十ヶ年賦、需要品拂下代残金四萬五千貳百四拾貳円七拾参錢六厘ハ二十ヶ年賦、共ニ壹割利引計算法ヲ以テ一時完納致度旨出願ニ付、大蔵大臣協議ノ上、願ノ通聞届ケ、客月二十二日同大臣連署指令セリ。因テ別紙利引計算書ヲ付シ右報告ス。

明治二十年十一月十一日

農商務大臣伯爵 黒田清隆

内閣総理大臣伯爵 伊藤博文殿

記

一、金拾八萬八千貳拾九円九拾錢壹厘

兵庫造船所拂下代価

内

金三萬九千六拾壹円拾四錢四厘

今回一時還納高

金拾四萬八千九百六拾八円七拾五錢七厘

五十ヶ年賦一割利引減

一、金四萬五千貳百四拾貳円七拾参錢六厘

需要品拂下代還納残額

内

金貳萬百七拾五円九拾五錢三厘

今回一時還納高

金貳萬五千六拾六円七拾八錢三厘

二十ヶ年賦一割利引減⁽³⁵⁾

以上

この一割利引計算法とはどのような計算法であるのか、これまでの確に理解されたことはない。まことに不思議な計算方法であるが、当時の民間資本の蓄積が不十分な状況の中で、官営工場の払下げを早期に実施したいという政府の方針が、このような不可解な計算方法を実施させたものと思われる。とにかく川崎は、兵庫造船所の固定資産代価188,029円余、需要品払下げ代残額45,242円余、合計233,271円余を、即金で59,237円余を上納することで、兵庫造船所を11月18日から完全に自己の手中に納めたのである。しかもこの重要な決定が閣議にかけられず、松方正蔵大臣と黒田農商務大臣（ともに薩摩出身）の2人だけで相談しているのも、不思議なことである。

Ⅷ. むすび — 川崎の人脈形成能力

こうして川崎造船所は明治20年11月から完全な私企業となり、川崎正蔵の指揮のもとに造船業界における地位は急速に高くなっていった。しかし三菱長崎造船所に対抗するためには、新しい大船架を建設することが至上命令となり、巨額の資金を確保するためには、これまでの個人企業を株式会社に変更することが必要となり、また川崎が明治26年11月から大病をわずらったこともあり、松方正義首相の忠告もあり、ついに明治29年10月に株式会社川崎造船所が発足し、社長には松方正義の三男で米国留学中の学資を川崎が負担した松方幸次郎が就任した。川崎は総株数4万株のうち2万株の大株主となり、その巨額の配当により富豪の生活を享受したのである。⁽³⁶⁾すでに明治20年ごろに建築した神戸布引の本邸には長春閣という美術館を建て、若い時から蒐集した美術品を陳列し、知人を招いて美術談をするのが大きな楽しみであったが、これが川崎が政財界人と交際するための手段であったと言ってもよい。明治23年9月6日に行われた長春閣の開館式には、伊藤博文前総理大臣、高島鞆之助陸軍中將、中井弘元老院議員をはじめ、政財官の各界の来賓が百数十人も集まり、伊藤博文が揮毫した「川崎美術館」、有栖川宮威仁親王が揮毫した「長春閣」という額が川崎に贈られた。松方正義は関西を訪れた時はしばしば川崎邸を訪れて美術論を交しているし、井上馨、フェノロサ、中井弘、村野山人、高島鞆之助らも川崎正蔵と美術を通して親交があった。また井上馨は川崎に17,000円という大金の借用を依頼しているが、⁽³⁷⁾明治19年の官営兵庫造船所の貸下げの時に、井上が川崎への貸下げを主張したことへの思義から井上への融資に応じたのではないかと思われる。

最後にまとめとして、川崎が交際した薩摩出身者を整理してみよう。

1. 政治家。大久保利通、松方正義、黒田清隆、中井弘、久保之昌、牧野紳顕。
2. 軍人。西郷従道、川村純義、高島鞆之助、山本権兵衛、大山巖。
3. 官僚。前田正名、吉田清成、大山綱昌、与倉守人。
4. 実業家。五代友厚、松方幸次郎、村野山人、吉原重俊、伊集院兼常。

5. 医家。高木兼寛。

このような各界の有名な薩摩出身者との間に、親密な人脈を形成する能力を持っていたこと、さらにこれらの薩摩出身者を通じて、薩長藩閥政府の中枢にいた長州藩出身の、伊藤博文、井上馨、

山県有朋らの有力政治家とも親しく交際していたことが、明治19年の官営兵庫造船所の貸下げ、続いて20年の払下げを受けることに成功し、その後も川崎造船所を一流企業に発展させた、最大の条件であったことを強調しなければならない。

注

- (1) 学本実彦『川崎正蔵』、吉松定志発行、1918年。
- (2) 楳西光速『政商から財閥へ』、筑摩書房、1964年。
- (3) 大島清・加藤俊彦・大内力共著『人物・日本資本主義3（明治初期の企業家）』、東京大学出版会、1976年。
- (4) 寺谷武明「産業財閥 — 浅野・川崎・古河 —」（安岡重明編『日本の財閥』）、日本経済新聞社、1976年、pp.75~105。
- (5) 小林正彬『日本の工業化と官業払下げ — 政府と企業』、東洋経済新報社、1977年。
- (6) 三島康雄『阪神財閥』、日本経済新聞社、1984年。
- (7) 小林正彬『政商の誕生 — もうひとつの明治維新』、東洋経済新報社、1987年。
- (8) 平野富二と石川島造船所については、寺谷武明『日本近代造船史序説』、巖南堂書店、1979年、全編を参照。
- (9) 小林正彬『日本の工業化と官業払下げ — 政府と企業』、東洋経済新報社、1977年、141頁。
- (10) 小林正彬『前掲書』、267~269頁。
- (11) 寺谷武明『前掲書』、73~74頁。
- (12) 三島康雄「造船業参入の歴史的前提 — 川崎正蔵と浜崎太平次」（『研究季報』開学記念号）、奈良県立商科大学、1990年、33~42頁。
- (13) 山本実彦『前掲書』、63~66頁。
- (14) 早稲田大学図書館蔵『大隈文書』。
- (15) 藤村通『松方正義』、日本経済新聞社、1966年、16~74頁。
- (16) 「三田島井麻布竿町方要書」（川崎家資料）。
- (17) 山本実彦『前掲書』、125~127頁。
- (18) 『同上』、127~128頁。
- (19) 中部よし子「松方正義の川崎正蔵への手紙」、（『神戸の歴史』、16号）、神戸市長総局、1987年、2頁。
- (20) 宮本又次『五代友厚伝』、有斐閣、1981年、全編を参照。
- (21) 川崎より五代への手紙（明治11年7月27日）。
- (22) 同上（明治12年1月4日）。
- (23) 同上（年不明、8月6日）。
- (24) 同上（年不明、10月9日）。
- (25) 同上（年不明、12月）。
- (26) 同上（年不明、7月21日）。
- (27) 寺谷武明『前掲書』、38~45頁。
- (28) 国立公文書館蔵「公文類聚第十編」（寺谷武明『前掲書』、73頁）。
- (29) 国立公文書館蔵「公文類聚第十編（卷之三十三）」。
- (30) 同上。
- (31) 山本実彦『前掲書』、127~128頁。
- (32) 同上、129頁。
- (33) 同上、141頁。
- (34) 国立公文書館蔵「公文類聚第十一編（第四十四卷）」。
- (35) 同上。
- (36) 三島康雄『阪神財閥』、日本経済新聞社、1984年、373~385頁。
- (37) 井上馨から川崎への手紙（年不明、12月19日）。

〔附記〕本稿を執筆するにあたり、川崎芳久氏、国立公文書館、大阪商工会議所、早稲田大学図書館、国立国会図書館（順不同）より、貴重な資料を見せて頂いた。厚く感謝の意を表する次第である。